

# 館林藩主の系譜

～大名となった藩主の家～

令和4年2月15日

須永 清 (館林文化史談会)

## < 館林城の藩主 >

館林藩は江戸時代を通して、**7つの家**が藩主を務めました。  
藩主家を就封順で表すと、榊原家、大給（おぎゅう）松平家、  
館林徳川家、越智（おち）松平家、太田家、井上家、秋元家です。

今回は「館林藩主の家」がどのような家であるか、徳川家の家臣になった経緯やご先祖様・子孫などの話を紹介したいと思います。

なお、藩主家の家系図や先祖／子孫の情報は主に江戸時代に作られた『寛政重修諸家譜』を元にしてしています。（以下、「家譜」と呼ぶ）

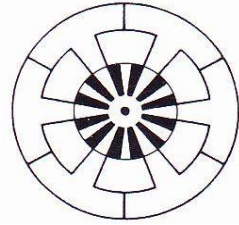
※家譜は大名家の自己申告を元に作られたため、異論もあります。

7つの藩主家の就封の順番は次の表のようになっています。

家名	藩主期間と当主	石高	その他
榊原家	天正18年(1590)～寛永20年(1643) 榊原 康政(やすまさ) 榊原 康勝(やすかつ) 榊原 忠次(ただつぐ)	10万石 →11万石	慶長20年5月～ 元和元年12月 城主不在 白河へ転封
<b>寛永20年(1643)～寛永21年(1644) 幕府直轄領</b>			
大給松平家	寛永21年(1644)～寛文元年(1661) 松平 乗寿(のりなが) 松平 乗久(のりひさ)	6万石 →5.5万石	浜松より転封 佐倉へ転封
館林徳川家 (館林宰相家)	寛文元年(1661)～天和3年(1683) 徳川 綱吉(つなよし) 徳川 徳松(とくまつ)	25万石	天和3年徳松の 死去により廃藩
<b>天和3年(1683)～宝永4年(1707) 幕府直轄領</b>			
越智松平家 (第一次)	宝永4年(1707)～享保13年(1728) 松平 清武(きよたけ) 松平 武雅(たけまさ) 松平 武元(たけちか)	2.4～ 5.4万石	棚倉へ転封

家名	藩主期間と当主	石高	その他
太田家	享保13年(1728)～延享3年(1746) 太田 資晴(すけはる) ※大坂城代就任により享保19年(1734)～ 元文5年(1740)の間は幕府直轄領 太田 資俊(すけとし)	5万石	棚倉より転封  掛川へ転封
越智松平家 (第二次)	延享3年(1746)～天保7年(1836) 松平 武元(たけちか) 松平 武寛(たけひろ) 松平 斉厚(なりあつ)	5.4～ 6.1万石	棚倉より転封  浜田へ転封
井上家	天保7年(1836)～弘化2年(1845) 井上 正春(まさはる)	6万石	棚倉より転封 浜松へ転封
秋元家	弘化2年(1845)～明治4年(1871) 秋元 志朝(ゆきとも) 秋元 礼朝(ひろとも)	6万石	山形より転封 廃藩置県

# 榊原家



家紋 源氏車

## 家譜

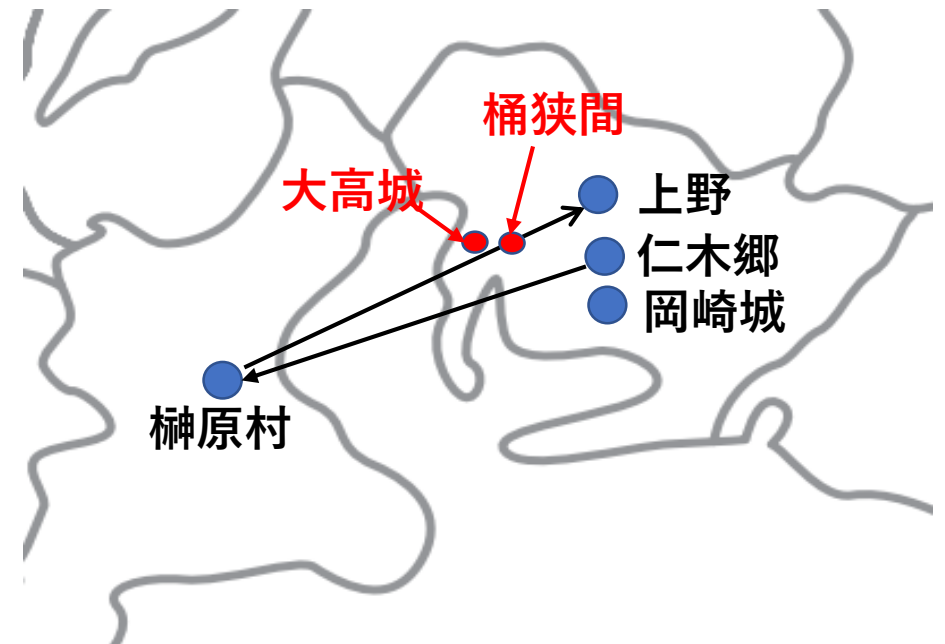
仁木義長〔右京大夫〕の六代の子孫である孫次郎七郎利長が伊勢国一志郡榊原村（現・津市榊原町・・・榊原温泉が有名）に住み、榊原を名乗る。

※仁木義長とは、... 三河国仁木郷生まれで、足利尊氏の重臣。  
戦功により伊勢国などの守護となる。墓も伊勢にある。

## 徳川家との関係

利長の孫で、康政の祖父である清長が三河国上野（現・豊田市）に移り、岡崎城主・松平広忠（徳川家康の父）に仕え、その子の長政（康政の父）が家康に仕えた。

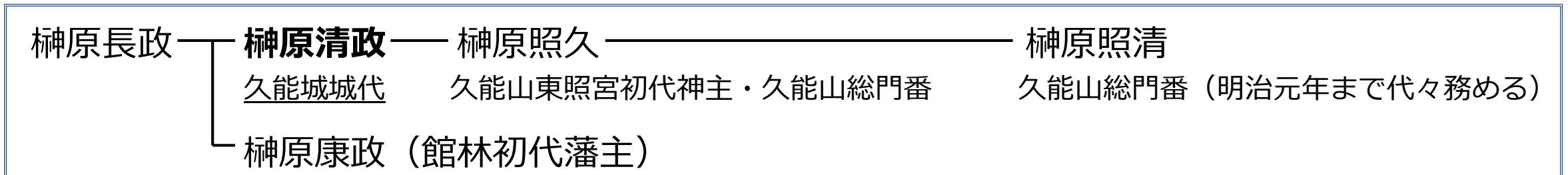
永禄3年（1560）康政が学問をしていた大樹寺（松平家の菩提寺）で家康に見い出され、小姓として仕え、**徳川四天王**と呼ばれる重臣になり、館林城を与えられて大名となった。



# 榊原家の力 その1 徳川家を支える

榊原家は初代・康政が家康の近習・秀忠の補佐役として仕え、2代・康勝は大坂の陣で先鋒を務め、3代・忠次は家光・家綱の側近として政をとるなど将軍に近い立場で徳川家を支えた。ここでは、他の例を紹介する。

## 体が弱くて本家を継げなかった男の子孫が家康の葬儀をし、久能山を守る



康政の兄の清政は体を壊して館林の康政の元に身を寄せていたが、家康の命により慶長11年（1606）清政は久能（山）城城番を命じられる。その死去後は照久（当時は清久）が継承した。元和2年（1616）に家康が死去すると、照久は神主として祭祀を行う。その後、久能城は久能山東照宮に改修され、神職と久能山総門番を兼務。（後に照清が神主を返上し、総門番に専念）なお、家康死因と1つとされる「鯛の天ぷら」の鯛を献上したのは照久であった。

# 榊原家の力 その1 徳川家を支える

## 有力外様大名を水戸家とサンドイッチで牽制？

榊原家の江戸上屋敷は小石川御門内（水戸家後楽園の向かい）→神田橋内（綱吉の神田御殿跡）→小川町（一ツ橋の外・現在の神田小川町はその一部）と移転した。しかし、江戸時代を通して榊原家中屋敷は池之端にあった。

ここは、加賀殿（加賀前田家上屋敷・現在は東大）を水戸家と挟む場所である。

（図中の松平備後守や松平出雲は前田家の一族）  
加賀殿・前田家は100万石を越える大外様大名であり、幕府から見れば注意すべき大名である。なお、榊原家中屋敷は明治時代に岩崎家の所有となり、今も「旧岩崎家庭園」として名残りを残している。



国立国会図書館デジタルコレクション 江戸大絵図

# 榊原家の力 その2 家を継ぐ

## 改易のピンチを乗り越える

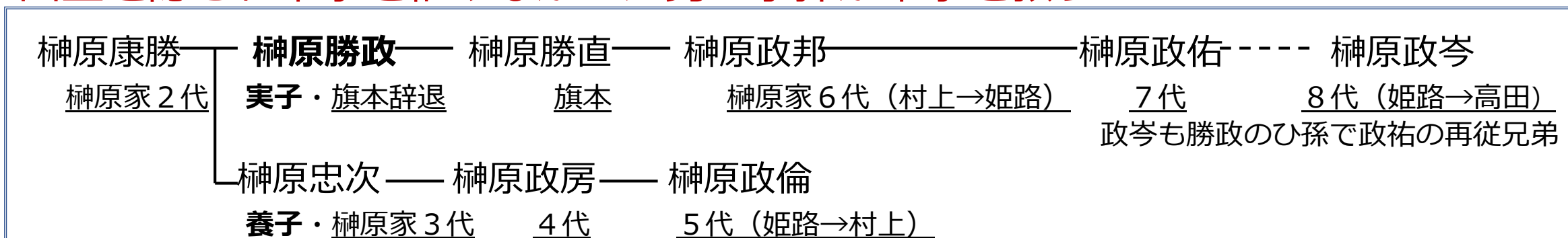
### ①後継者不在によるピンチ

慶長20年(1615) 第2代藩主・康勝の急死 →後継ぎがない →改易のピンチ  
家康の「大須賀家は康高以来、徳川家のために尽くしてくれたが、**榊原家の廃絶には代えられない**」という指示により、孫の大須賀忠次が榊原家を継ぎ、大須賀家は廃絶。

### ②藩主の不行跡による改易のピンチ

第8代藩主・政岑の享保の改革に背く不行跡により改易のピンチが訪れる(吉宗激高!)  
→政岑は強制的に隠居。榊原家は越後高田に転封(陰に徳川四天王・康政の力あり?)

## 出生を隠され本家を継げなかった男の子孫が本家を救う



※榊原家 6代以降は明治まで勝政の家系



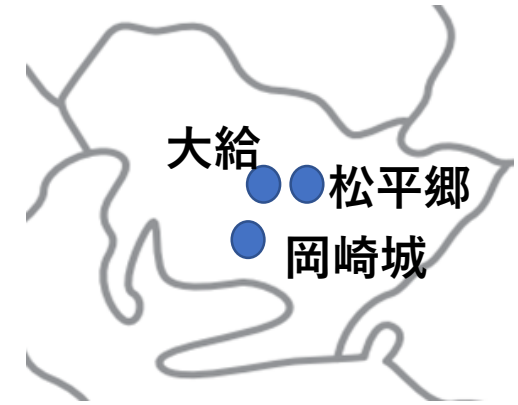
# 大給松平家



家紋 一葉葵

## 家譜

家康の五代前の親忠の二男の乗元を家祖とする。  
三河国加茂郡大給に住み、大給松平と呼ばれる。



## 徳川家との関係

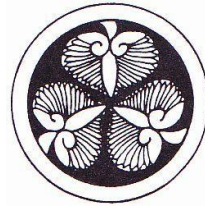
松平庶流十四家（家康の代までに松平本家から分家した家）の一つである。乗寿（のりなが）の祖父の真乗が家康に仕え、父の家乗が天正18年（1590）家康の関東入封に伴い、上野国那波郡（現・伊勢崎市）に一万石を拝領し、大名になる。

多数の老中を輩出し、幕府の要職を務めた譜代大名の家である。

乗寿（のりなが）12年、乗邑（のりさと）22年、乗完（のりさだ）4年、  
乗寛（のりひろ）17年、乗全（のりたけ）7年 **ほぼ60年間！**

**※江戸時代の当主10人の内、5人が老中を務めた。**

## 徳川家（館林宰相家）



家紋 三葉葵

誕生

徳川家康→御三家、徳川吉宗→御三卿 （自分の直系の子孫を将軍に．．．？）

徳川家光→家綱（将軍）、綱重（甲府）、綱吉（館林）

慶安4年（1651）：2月綱重と共に賄料領地15万石。

この年4月に家光が死去し、8月家綱が将軍に就任。

承応2年（1653）：綱重と共に元服。

綱吉は従三位中将兼右馬頭に叙任。（綱重は左馬頭）

※右馬頭：律令制の下で政府の馬の管理を司る  
馬寮（めりょう）の長官

寛文元年（1661）：綱重と共に10万石加増され、参議に叙任。

※参議：唐名は宰相で朝廷の議政に参与する  
館林城を与えられる。（綱重は甲府城）

将軍家綱を支える甲府徳川家と館林徳川家（館林宰相家）が誕生。

## 館林藩が消えた

消滅

延宝8年（1680）綱吉が将軍になり、徳松が西の丸入り（世子）

天和2年（1682）←徳松死去の前年

館林25万石の半分近い上野国約11万5千石を200人余りの旗本に分与

→この時、秋元時朝（3代富朝の甥）が千石加増されて、小泉町（現在の  
大泉町）の一部を領地とした。（元禄11年までの17年間・秋元家と  
邑楽郡の初めての出会い）

## 館林城も消えた

天和3年（1683）閏5月徳松死去→翌月には城の破却開始  
城は徹底的に壊され、堀も全部埋めて、すっかり畑にして  
しまい、城下の人々に分け与えられた。

この破却を行った江戸の石工が尾曳稻荷神社に灯籠を寄進 ⇒  
（天和三年癸亥年八月江戸本材木町石屋次右衛門）



## 越智松平家



家紋 丸に揚羽蝶

### 家譜

家祖・清武は、綱吉の兄の徳川綱重を父に寛文3年（1663）に誕生するが、家臣の越智喜清の養子になり、越智家を継ぐ→越智松平家の呼び名の由来。

（同母兄の家宣も新見家の養子に出され、6歳の時に呼び戻されている。）

家宣が将軍世子になった宝永元年（1704）に2千石の旗本（42歳）になり、宝永3年には加増を受けて1万4千石の大名となる。さらに、同4年に松平の称号を許され、更に1万石加増されて館林城地を賜った。以後、館林城の再興に力を注ぎ、私達の知る館林城の形はほぼ越智松平氏の努力の結晶である。

### 徳川家との関係

清武、嫡男・清方死後、親藩として、尾張徳川氏系（2,7代）、水戸徳川氏系（3,4,5,6,8代）が跡を継ぐ。例えば、7代・武成の兄弟は松平容保等の高須4兄弟、8代武聡の兄は徳川慶喜である。なお、館林における越智松平家の治世は112年間と、歴代最長である。（天正18年以來、282年間）

## 越智松平家・幕末の苦難の道

### ①浜田への転封

天明の飢饉以来の不作続き、利根川等の氾濫による水害、館林城下の火災など不運が続く→収穫高の多い領地との交換や転封を願い出る→浜田への転封を命じられる

(天保7年(1836)) → 260里余り/1カ月の移転 😞



浜田藩中奉納手水鉢 (第二資料館)

### ②浜田藩から鶴田(たづた)藩へ

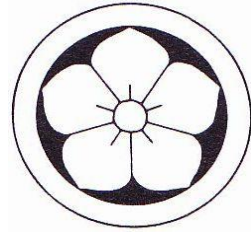
慶応2年6月、第二次長州征伐の戦いで長州藩に攻められて敗れる。和議交渉中に藩主一家が城を焼いて浜田を退出。藩士千余名、その家族三千余名、全員が浜田脱出。→まず、藩士家族が飛び地の美作領(久米北条郡・現在は岡山県津山市の一部)に移動し、当地の百姓家に分宿。→半年後に藩主と藩士千余名が移り住み、鶴田藩を起す。(飛び地は8千石)

加増願いにより、慶応4年に龍野藩預かり2万8千石が移管されたが、それまでの農民運動を受け継ぎ、明治3年にようやく騒動が沈静化。

藩主や藩士の屋敷建設を始めるも、明治4年の廃藩置県を迎える。



## 太田家



家紋 丸に桔梗

### 家譜

摂津源氏・源頼政の孫の資国が丹波国太田郷（京都府亀岡市）に住んで太田氏を称する。室町時代の関東管領・扇谷上杉家の家宰を務めた資清は河越城、その子の資長（太田道灌）は江戸城を築く。しかし、その後は後北条氏に反旗を翻したことにより、安房国（里見）、常陸国（佐竹）と流浪する。

### 徳川家との関係

館林藩主になった資晴の高祖父・重正が天正18年（1590）関東入りした家康の家臣となった。（5百石）名家の出（道灌の子孫）であったためと言われる。そして、重正の子の資宗が、家光側近での働きにより寛永12年（1635）に1万石を加増され、1万5千6百石の山川藩（下野国足利市）で大名になった。このように、太田家は譜代大名の中でも新参であるが、江戸時代を通じて2人の老中、3人の大坂城代を輩出した。

なお、館林藩最後の藩主である秋元礼朝は太田家からの養子である。

## 太田家（道灌）と館林

文明3年（1471）古河公方と上杉管領の戦いの際、道灌が上杉方の武将として館林城を攻撃した。（奇しくもその257年後に子孫が館林城主となった。）

『太田家家譜』

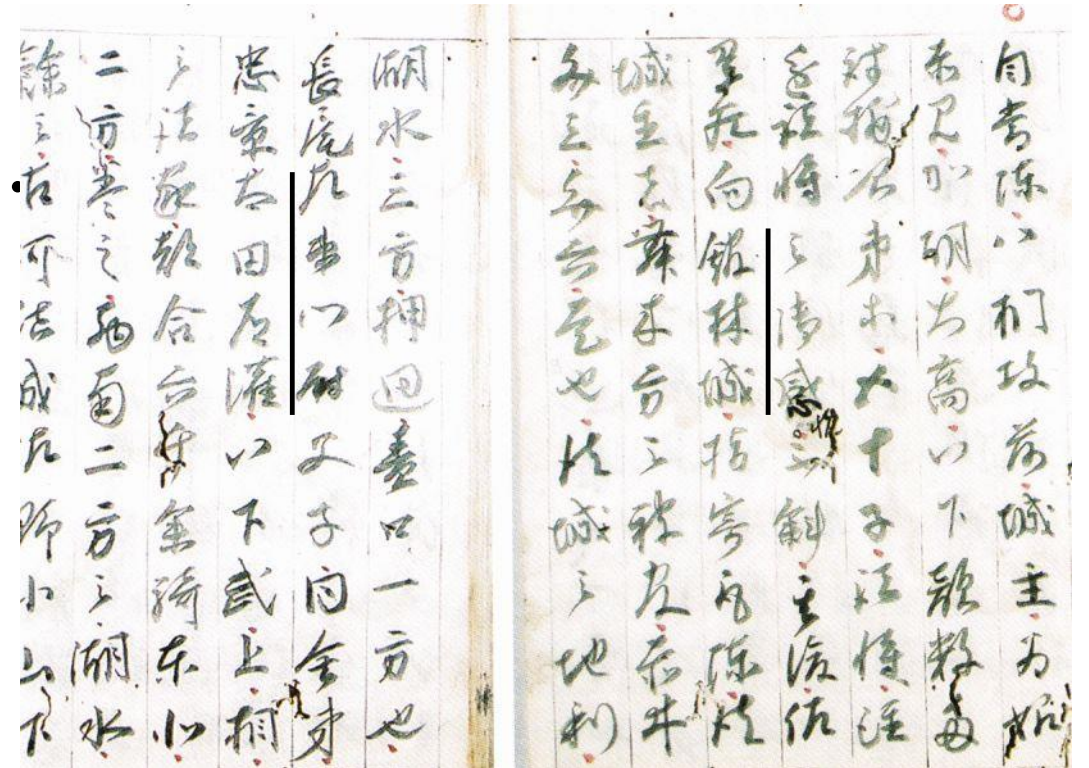
佐貫庄・立林（館林）および舞木の城に攻め寄せて戦った

『松陰私語』

足利の八栲城を落とした後、佐貫庄館林城に向かい、長尾左衛門尉父子同舎弟忠景・太田道灌以下、武蔵・上野・相模の諸家の軍勢六千余騎で館林城を攻撃した

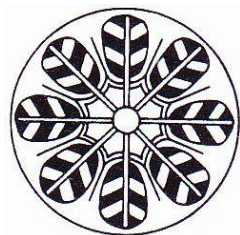
なお、山川藩のあった山川町と八栲城のあった八栲町は足利市の隣り合わせの町名

松陰私語（部分）（群馬大学図書館蔵）→





# 井上家



家紋 八鷹羽

## 家譜

河内源氏初代の源頼信の三男・頼季（長兄が頼義、甥が義家）が信濃国高井郡井上（上信越自動車道の須坂長野東IC周辺）に移住し井上氏を名乗った。遠江への移住時期など、阿部氏から養子に入った清秀以前の経歴は不明。

## 徳川家との関係

井上清秀が大須賀康高（榊原康政の岳父）に属して戦い、子の正就（まさなり）が秀忠の小姓として出仕した。その後の働きにより、元和元年（1615）正就は1万石の大名となり、老中も務めて元和8年には5万2千石で横須賀城主となる。横須賀城（静岡県掛川市）は、かつて井上氏の出世の糸口になった大須賀家が城主であった城である。井上家も**老中5人を排出した譜代大名**である。

正就（まさなり） 正岑（まさみね） 正経（まさつね）

正春（まさはる・西の丸老中） 正直（まさなお）

## 井上家の災難 正就の殿中刃傷事件

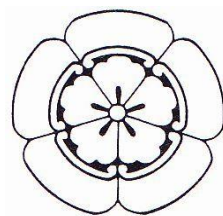
江戸時代を通じて、江戸城内で刃傷事件は7件起き、浅野内匠頭の「松の廊下の吉良上野介への刃傷」事件が最も有名。それ以外にも、綱吉を将軍にした男・堀田正俊や田沼意次の嫡男・意知などが被害にあっている。

それらの中で、最初に発生したのが井上正就の殺害事件となる。正就の嫡男・正利の縁談がらみのようだが、加害者は目付の豊嶋正次である。当時、正就は老中だった。

## 井上家の二度の転封と館林藩

- ①文化14年（1817）館林城主になった正春の父・正甫（まさもと）が浜松藩主の時、棚倉（福島県棚倉町）へ転封になった。  
なお、棚倉の小笠原家は唐津へ、唐津の水野家が浜松に移り（三方所替え）、これ以降、水野忠邦が寺社奉行、大坂城代、老中と出世していく。
- ②この老中・水野忠邦によって、越智松平家は浜田に移封させられる。浜田の松平家が不行跡により棚倉へ、棚倉の井上氏（正春）が館林へ、館林の越智松平氏が浜田へ転封になった。（三方所替え）

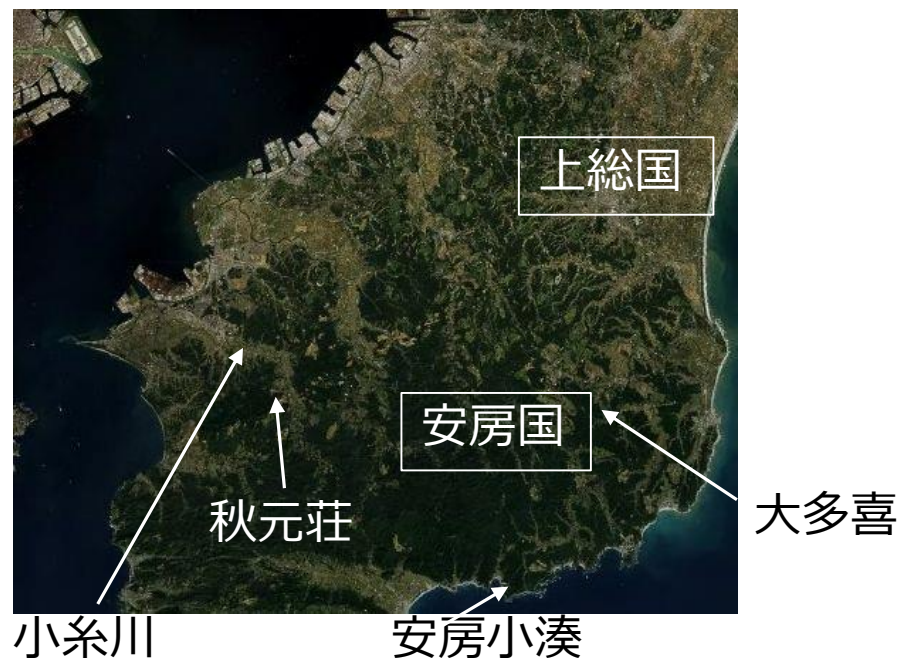
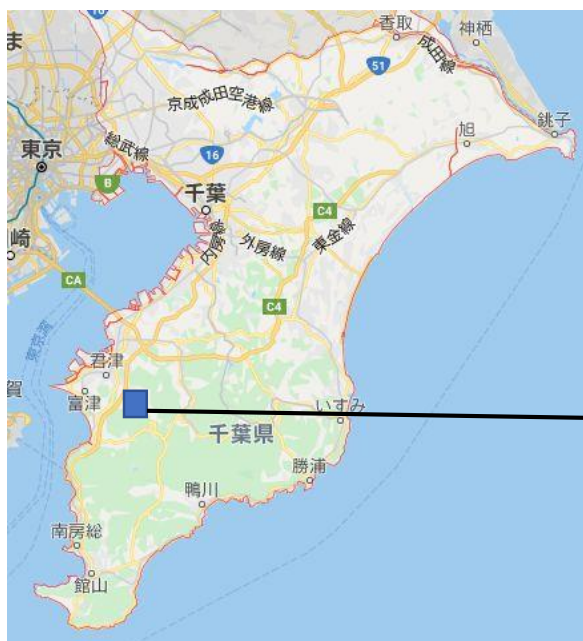
# 秋元家



家紋 瓜

## 家譜

関白藤原道兼（道長の兄）の八代の孫である宇都宮頼綱の子・泰業が嘉禄年中（1225-27）に上総国周准郡秋元庄（君津市）を領して秋元氏を称し、その13代目の政朝の時に秋元庄に定住した。ついで、その子の景朝が深谷に移り、上杉憲賢の重臣となって、上野国惣社（前橋市）に所領を持った。



## 徳川家との関係

景朝の子の長朝が家康の家臣となり、関ヶ原の戦いの際の功により、慶長6年（1601）上野国惣社にて1万石の大名となった。

## 秋元泰朝と東照宮

長朝の子の泰朝は近習出頭人（家康の近臣として政務を行う）と呼ばれるほどに家康の信任が厚かった。

元和2年（1616）家康が亡くなると久能山に埋葬され、翌3年に日光に改葬される。この時、泰朝は久能山から日光まで霊柩に供奉した。（館林を通った）

また、家光による寛永東照宮大改築の際には総奉行として事業の指揮をとり、今日に残る世界遺産の日光東照宮を完成させた。

その功として、日光山内には照尊院という泰朝の法号に因んだ小院が建てられている。



## 秋元喬知と八瀬童子

4代喬知は元禄12年（1699）から正徳4年（1714）まで約15年間老中を務めたが、浅野内匠頭刃傷事件および赤穂浪士討ち入り事件が起きている。また、宝永5年（1708）には八瀬童子の比叡山への入山制限の問題が起きた。これは当時の天台座主・公弁法親王（後西天皇皇子）が願い出て、同年中に幕府の裁許が出た。これにより柴薪伐採という生活手段を奪われた八瀬の住民（八瀬童子）は撤回を京都町奉行所に訴えたが、取り下げはできなかった。問題解決の過程で秋元喬知が幾度か嘆願を受け、現地も巡見し、助言も与えた。最終的には宝永7年7月、八瀬童子の入会権は元に戻り、八瀬童子は感謝のしるしとして、八瀬天満宮の中に秋元神社を創建し、喬知を祀った。



八瀬天満宮鳥居



秋元神社



館林・秋元別邸のまぐろ石。大正元年・喬知への従三位追贈の祝いとして八瀬より贈られた。

## 館林藩主の特徴

館林藩の特徴の1つに「藩主が徳川一門あるいは譜代大名」ということがある。すなわち、転勤が多い。その結果、藩主が頻繁に入れ替わることになった。

大名家	任地数	転封先
榊原	6	館林→白河→姫路→村上→姫路→高田
大給松平	1 2	上野那波→美濃岩村→浜松→館林→佐倉→唐津→鳥羽→伊勢亀山→山城淀→佐倉→山形→三河西尾
徳川	1	館林
越智松平	5	館林→棚倉→館林→浜田→鶴田
太田	9	下野山川→三河西尾→浜松→（大坂城代）→駿河田中→棚倉→館林→（大坂城代）→館林→掛川→上総柴山
井上	1 2	遠江横須賀→笠間→美濃郡上八幡→丹波亀山→下館→笠間→磐城平→（大坂城代）→浜松→棚倉→館林→浜松→上総鶴舞
秋元	5	上野総社→甲州谷村→川越→山形→館林

太田家と井上家の上総への転封は、明治になり将軍家が静岡に移った影響である。

# ご清聴ありがとうございました

次の機会には（あれば）、藩主一人一人についてお話しさせていただくことを考えています。その節はよろしくお願いいたします。

参考文献：『新訂 寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会）

『館林市史 資料編2 佐貫庄と戦国の館林』（館林市史編さん委員会編）

『館林市史 資料編3 館林の大名と藩政』（館林市史編さん委員会編）

『館林市史 通史編2 近世館林の歴史』（館林市史編さん委員会編）

『八瀬童子 歴史と文化』（宇野日出生著、思文閣出版）

『国史大辞典』（吉川弘文館）